

内閣総理大臣 賞

気軽な助け合いができる社会をめざして

香川県 土庄町立土庄中学校 1年

篠原 和誠（しのはら かずなり）

僕は、生まれつき脳性まひという病気のため、車いすで生活している。車いす生活では不便なことが多いのだが、時々、温かい気持ちになることがある。

それは、毎週通っているリハビリに行くためにバスに乗ろうとした時のことだった。いつもは運転手さんが手伝ってくれるのだが、その日は、車いすに気がついた乗客のおじさんが、すぐさま、「手伝おうか？」と声をかけ、車いすを持ち上げてくれたのだ。バスを止め、かけつけた運転手さんも座席を上げ、車いすを置くスペースを作ってくれた。無事バスに乗れたことにほっとしていると、後ろに座っていたお婆さんが、

「これ、もらい物やけど食べて。」

とかしわもちを僕の手へ渡してくれた。一人暮らしだと言っていたお婆さんは、僕を見て、離れて暮らすお孫さんのことを思い出したのかもしれない。しかし、全く見ず知らずの僕に、こんなに優しくしてくれる人がいるのかと驚いた。思いやりは伝染するのか、こんなやりとりがあったバスの中は、いつもより穏やかな空気に包まれ、居心地がよかった。ほんの三十分ほどのできごとだが、僕の心も温かくなった。

この日は本当に気持ちのよい一日だったが、こんな日ばかりではない。バスや電車の乗客に露骨に嫌な顔をされたり、バスの運転手さんがうまく介助できなかったりして悲しくなることもある。僕のような車いすの人も、健常者と同じように心配や遠慮することなく生活できないものかと考えていたところ、先日テレビで車いすユーザー寺田ユースケさんのニュースを見た。寺田さんは「車いす押してくれませんか？」と声をかけ、車いすを押ししてもらいながら全国を回る車いすヒッチハイクの旅をしている。

寺田さんは、僕と同じ脳性まひのため歩くのが不自由だが、健常者に負けたくないと言いつつ杖を使って生活していた。

しかし、両親のすすめで二十歳の時から葛藤しながらも車いすに乗ると、想像以上の自由に感動し、世界が広がったようだ。そして、「体が動く間に、新しい世界を観る旅がしたい。」という気持ちが芽生えた。また、旅の中で「車いす押してくれませんか？」とお願いすることで、町の中に「気軽な助け合い」を広められるかもしれない。さらに車いすだけでなくベビーカーやご年配の方など、生きづらさを感じている全ての人が気軽に「助けて」と言えるような世の中にでき

たら・・・。と考えるようになったそうだ。今では四百組以上の人に車いすを押してもらいながら、三十を超える都道府県を三年かけて回り、今年の四月には香川にも来ていた。

僕は寺田さんのことを知り、僕と同じ障害のある人がこんなに壮大なチャレンジをしていることに驚いた。僕は、いつも人に遠慮をしてしまい、なかなかお願いできない。相手に迷惑をかけてしまうのではないかと思うからだ。しかし、寺田さんは知らない人ともすぐに仲良くなり気軽にお願いをする。僕もそのような明るく前向きに人と関わる姿勢を見習いたいと思った。また、寺田さんから、社会をよくするためには、ただ心の中で思うだけではなく、それを行動に移し、まわりの人に働きかけたり理解してもらったりすることが大切だと学んだ。

今までの僕は、健常者に負けたくない、同じように見てほしいという思いのあまり、自分勝手に、人への感謝の気持ちが欠けていたように思う。中学校では、校舎のあちこちにスロープがつけられ、僕が生活しやすいように段差もなくしてもらった。フェリーにはエレベーターが付き、行く先々でいろいろな人が声をかけてくれる。僕は、まわりのたくさんの人に支えられながら生きているのだ。

では、僕は支えてもらうだけの存在なのだろうか。家族は十三年間僕を支え続けてくれているが、僕も家族の支えになっている（はずだ。）両親は特に口には出さないが、手のかかる僕を愛おしんでくれているのはよくわかる。僕は三つ子で、二人の弟たちに宿題を教えることだってある。そう考えると、一方的に「支える」ということは、ないのではないだろうか。誰かの存在が誰かの支えになる。「お互い様」で人間関係は成り立っているのだ。

だから、僕は素直に「助けて。」と言おう。そして、それを当たり前だと思うのではなく、してもらったことに対して素直に「ありがとう。」と言える人になりたい。困ったときは「お互い様」だ。僕も困っている人がいたら、力になりたい。身体を使って助けることは難しいけれど、相談になら乗れる。僕だって誰かの「大切な存在」になりたいのだ。助けて助けられて、感謝する。それが僕ができる「気軽な助け合い」の第一歩だ。

星塚のじいちゃん

宮崎県 宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校 3年

藤原 凜華（ふじわら りんか）

「星塚のじいちゃんと言ってくれ」かつて、「私にさわらない方がいい」と言っ
て握手を拒んだあなたがそう言ってくれた時、本当にうれしかった。あの時私た
ちは本当の家族になれたのだ。

私には、キティちゃんと阪神タイガースが好きなどってもおちゃめなおじい
ちゃんがいる。彼とは血のつながりはないけれど、それ以上の絆を感じられるすて
きな人だ。私は、おじいちゃんに年一回会えるのをいつも楽しみにしている。そ
のおじいちゃんが暮らしているのは、鹿児島県にある国立療養所星塚敬愛園。そ
う、おじいちゃんは、国の非道な政策によって家族も故郷も自由に選ぶ人生もす
べてうばわれた元ハンセン病患者である。

ハンセン病とは、らい菌に感染することで起きる病気だ。感染力はとても弱く、
現代の日本で感染し発病することはほとんどない。しかし、有効な治療法や薬が
なかった時代には、顔や手足が変形するというような外見に症状が表われてしま
うことから忌避されてきた。また、感染を防止するには患者を隔離する以外にな
いとも考えられていた。日本では、一九三一年の癩予防法によってハンセン病患
者をハンセン病療養所に強制的に入所させ一生に渡って世間から隔離する政策を
行っていた。それだけでなく子どもを持たなくさせたり、患者の出た家を消毒し
たり、無らい県運動を進めるなどしてハンセン病は恐ろしい不治の病という誤っ
た認識を国民に植え付けた。この政策のために、治療薬ができ、ハンセン病が治
る病気だとわかった後も、ハンセン病患者やその家族は極端な偏見と激しい差別
に苦しむことになった。しかもこの政策が終ったのは一九九六年。そんなに古い
話ではないのだ。かく言う私もおじいちゃんに出会うまで何も知らない人間だっ
た。

私がハンセン病について知ったのは、今から五年前、宮崎県主催の「ふれあい
ハンセン病療養所訪問事業」に参加した時だ。鹿児島県にある国立療養所を訪問
し、ハンセン病について正しく知ろうというプログラムだ。園での全体説明のあ
と、語り部として私たち家族の担当になったのがおじいちゃんだった。彼を見た
時、正直私は言葉が出なかった。なぜかというとな彼は義眼をはめていて、手は爛
れ、指がなかったのだ。それだけでなく、ちょっと怒っているような、話しかけ
にくい雰囲気ももっていたのでますます何を話していいのかわからなくなった。
でも、帰るまぎわ、せめて仲良くなりたい気持ちをこめて握手を求めた。しかし、

そんな私に彼は「私にさわらない方がいい」と言って、パッと反射的に手をひっこめたのだ。私はその時、なぜ？と複雑で切ない気持ちになった。彼はもうすでに病気は治っている。なのになぜ、と。しかし、少し考えて、彼をそうさせたのは、これまで受けてきたすさまじい差別や偏見によって深く傷つき、その心の傷が行動に表われてしまうものだと思った。

私たち家族は、彼の心の傷を知り、彼という人の人生について知りたいと思い、今度は元ハンセン病患者のだれかではなく個人をたずねることにした。二度目にお会いした時は、過去の歴史を聞くのはもちろん、一緒に歌をうたったり、散策をしたりして打ちとけた時間を過ごすことができた。

それから私たち家族は、毎年おじいちゃんの所をたずねている。まるでお正月におじいちゃんおばあちゃんの待つ故郷に帰るように。

おじいちゃんはずっと誰かとコミュニケーションをとることが苦手な方で写真に写ることも嫌っていた。でも、私たち家族と交流するうちに少しずつ心を開いてくれた。今では、手紙や電話でやりとりしたりもするし、一緒に写真に写ってもくれる。その写真をかざってもくれる。また、私の中学受験のときには誰よりも合格を祈ってくれた。だから、おじいちゃんから「星塚のじいちゃんと言ってくれ」と言われた時は、私たちを実の子や孫のように思ってくれていることや安心して手をにぎってもいい相手として信頼してくれたのだと思えたのでうれしくてたまらなかった。

これまでのあまりに過酷な経験が彼につけた心の傷は消えることはないでしょう。失った時間や家族をとり戻すことはできないけれど、私たちと新しい時間を重ねることで、おじいちゃんの人生が少しでも笑って過ごせる時間になるようにしていきたいと思う。それは私たち家族にとってもかけがえのないすてきな時間になるでしょう。おじいちゃんが私にくれた喜びを私も家族もそれ以上の喜びにしておじいちゃんにこれからも返していきたい。

おじいちゃん、あなたに会えて本当によかった。

二人の私

埼玉県 学校法人文理佐藤学園西武学園文理中学校 3年

北澤 夏紀（きたざわ なつき）

私には、4歳年上の姉がいる。生まれつき足が悪く、脳性麻痺という脳の障害を持っている。私は生まれてからずっと、車いすに座っている姉しか見たことがない。言葉もたどたどしく、精神年齢も、普通の人より進み方が遅い。けれど、明るく笑顔で、誰にでも優しい姉は、周りの人からとても愛されている。

でも、私は姉が嫌いだった。「障害者のくせに」「私より何もかも劣っているくせに」そんな事を思い始めたのは、小学校三年生の頃だった。学校に行っても、「〇〇ちゃんは見てるだけでいいからね。」といわれて勉強をまともにしていない姉。あたり前のように学校に行き、あたり前のように勉強をする私。でも母は、「お姉ちゃん、今日も学校行ってこれたの。偉いわね。」…悔しかった。毎日毎日学校に行き勉強している私は褒められないで、週に1回行くか行かないかの姉を、母はずっと褒めていた。どうして。どうして私の事は褒めてくれないの。どうしてお姉ちゃんより頑張っている私を褒めてくれないの。それをきっかけに、私の姉への嫌いな気持ちは募っていった。

ある日、家族で外食をすることになった。正直、私は外食が好きではなかった。姉が居ない時は楽しいけど、姉が居る時の周りからの視線が嫌いだった。チクチク、ズキズキと皮膚や心に突き刺さってくるような気がした。冷たく、とても差別的な視線だった。入店をして、席についておちついた頃、隣のテーブルのカップルが不機嫌な顔をして、手を上げて店員さんと呼んでいた。店員さんを待っている時、こちらをチラチラ見てはコソコソ話をして、嫌な感じ。と思っていたが、店員さんが来てそのカップルがお願いした事が衝撃的すぎて、思わず口が開いてしまった。「隣の車いすの人が急に暴れだしたら嫌なので、席を変えてもいいですか？」

信じられなかった。怒りがふつふつとわき上がり、頭に血がのぼった。幸い、カップル側の方の外側に座っていた私にしか聞こえなかったらしく、姉も母も父も楽しく会話を続けていた。けれど、私の頭は噴火寸前だった。第一姉は、暴れしなければ騒ぎもしない。そんなお願いをいきなりされた店員さんもどうしていいか分からなかったらしく、「申し訳ありません。当店ただ今大変混んでおりまして、他のテーブルが空いていないんです。」といい、すぐに別の人のオーダーをとりに行った。すると諦めたのか、カップルはお店を出ていった。

食事をし終わって、会計をしている母と父をお店の外で待っていると、ぷーぷー

と可愛らしい音を鳴らしながら小さな女の子が歩いてきた。私と姉の周りを三周小走りした後、姉の車いすのスポークカバーをぺたぺた触って「かわいい」と笑顔で言った。嬉しかった。そういうと女の子は、どこかへ行ってしまった。

その後、私は家に帰ってじっくりと考えてみた。何故あんな酷い事を言う人がいるのだろう、と。でも、それと同時に思った。「自分はどうなのだろうか。」誰かが障害者の方に暴言や差別的な言葉を言っているのを見たら、酷い、と思うのに、そう思っている自分も、姉に酷い態度をとっている。他の人はダメで自分はいい。そんなのは間違っている。そして、入店した時に感じたあの冷たい視線。直接向けられた姉は、どう感じたのだろうか。私は思いきって、姉に聞いてみた。

「お姉ちゃん、お姉ちゃんはさ、いろんな人に見られたら、どう感じる？」いつも嫌な態度をとっている私にこんな事を聞かれて、姉は少しとまどっていた。しかし、姉はにこりと微笑んで、「確かにソワソワするけど、平気だよ。なっちゃんがずっとそばにいてくれるから。」すると、自然に私の目から涙がこぼれた。何故か分からなかったけど、大声で泣きたかった。

人はそれぞれ、違いがある。肌の黒い人、左利きの人、二重の人、障害も、人それぞれの違いだと、私は思う。けれど人は、その違いを嫌う生き物だ。自分と違う物を見つけると、関わりたくないと無意識に思ってしまう。でもよく考えてみよう。自分と同じ人なんてどこにもいない。自分はこの世で一人だけなのだ。そして、その無意識な差別のせいで、少しでも傷ついている人がいるという事を分かってほしい。「自分は差別なんかしていない」と思っている人も、もう一度ふり返ってほしい。

一人一人が、少し心の広さを大きくする事で、違う誰かが笑顔になる。あの小さな女の子の笑顔が、世界中で咲くことを願って。

曾祖母との関わりから見えてきたこと

和歌山県 和歌山県立古佐田丘中学校 1年

俵 和花（たわら のどか）

「和花だよ。ばあば」

耳元で大きな声でゆっくりと話しかけると曾祖母はいつも「のどかちゃんっていうの？いくつ？」とやさしく聞いてきます。

私の曾祖母は、認知症という病気でした。その病気のせいで、すぐに私の事が分からなくなり、いつも自己紹介から曾祖母と私との会話が始まるのです。

しかし、病気になる前の曾祖母は、私の顔を見るなり「和花ちゃん、よく来てくれたね。」と声をかけ抱きしめてくれていました。曾祖母に絵本を読んでもらったり、お手玉を教えてもらった思い出が今も私の心の中でしっかり記憶されています。曾祖母と過ごす時間は友達や両親と過ごす時間とは、また異なり、とてもゆっくりとした時間が流れ温かい気持ちになれました。

そんな大好きな曾祖母が認知症という病気になり、しだいに私の事も曾祖母の記憶から消えるようになると今までのように同じ時間を一緒に楽しむ事ができなくなり、私の中でどこか曾祖母に対する心の距離ができてしまっていました。

私の事はよく「みっちゃん」と間違えました。「みっちゃん」とは母によると曾祖母の妹で戦時中に栄養失調で亡くなったそうです。曾祖母は「みっちゃん」と私に呼びかけては引き出しから、食べかけのお菓子を出して私に手渡してきました。私は「ありがとう」とお礼は伝えるものの、その後、どうすればいいのか。曾祖母の行動に、ただ、とまどっていました。

父の事も曾祖母の記憶の中から消え、色々な人に変身しました。私の記憶の中で一番印象深く残っているのは、曾祖母が父の事を自分の弟だと思い込んだ時の事です。曾祖母の弟は戦死しているのですが、曾祖母は父を見るなり、「よう無事で帰ってこられた」と父の手をしっかり握って泣き出したのです。しかし父は、笑顔で「長い間待たせてすみません。無事帰ってまいりました」と答えていました。すると曾祖母は、とてもうれしそうな顔になり、弟がいない間の戦争中の大変だった生活を何度もくり返し父に話していました。

その時の私には、父の行動が理解できず、不思議な世界にいるかのように父と曾祖母との会話を聞いていました。

それから間もなく曾祖母は亡くなったのですが、亡くなって曾祖母と過ごした日々をふり返ると「曾祖母に私がしてあげられる事はなかったのか」心の距離がうめられないままのお別れになってしまった事に後悔が残りました。

そんな時、出会ったのが「忘れても好きだよ。おばあちゃん」という本でした。この本は認知症であるおばあちゃんと孫との関わりが描かれていました。また、おばあちゃんの人生を大きな一本の木に例え、上の葉を最近の出来事、下の葉を昔の思い出。上の葉から順に散っていくというお話は認知症という病気の事がよく分かり、私の頭の中にずっと入ってきました。

曾祖母が私や父の事は記憶からすぐに消えるのに戦争の時の事はよく覚えていた事も、父が曾祖母の弟になり切った行動をとっていた事も、今の私には理解できません。しかし、私は曾祖母の気持ちに寄り添った関わりができていたのか。という疑問がわきました。それが曾祖母に対する心の距離だったのではないか。病気がしだいに進行していく中で不安や孤独を感じていたのかもしれない。もっと曾祖母の気持ちに寄り添う事ができていたなら、最後まで曾祖母との時間を楽しむ事ができたかもしれないと思いました。

今、高齢化が進み、認知症という病気は特別な病気ではなくなっています。

しかし認知症という病気を正しく理解している人は少ないと思います。

先日も学生の集団が歩いていた時、「認知症やん」と友達同士でからかって言っているのを見ました。それを認知症の方や家族の方が聞けば、どう感じるでしょうか。

実際に経験しないと自分事として考える事はできにくいけれど、私は、みんなにもっと認知症という病気の事を知ってほしいです。「認知症」という病気に対する誤解や偏見をなくし正しく理解する事で認知症の方の気持ちに寄り添った関わりができてくるのだと思います。また、その事が認知症の方にとっての安心につながりお互いに気持ちのよい関係が築けるのではないかと私は考えます。

これから、ますます認知症の患者が増えてくると言われています。それは、誰もが認知症の問題を抱える可能性があるという事です。だからこそ、認知症という病気を正しく理解する事が「令和」という新しい時代を迎えた今、必要になってきているのではないのでしょうか。

思いやりのバトン

東京都 小金井市立南中学校 3年

安齋 さくら (あんざい さくら)

ある日の夕方、私は奇妙な光景に出会いました。駅の改札口の前で、若い女性が四人、縦一列になり前の人の肩をつかんでつながってじっとしているのです。帰宅ラッシュの人混みの中、まるで電車ごっこをしているかのような女性たち。近くまで来て、私はその理由がわかりました。彼女たちは、白杖を持っていた。視覚障害のある方たちだったのです。

一緒にいた母が彼女たちに駆け寄り、声をかけました。

「大丈夫ですか。何かお困りでしたら、お手伝いします。」

母の声に反応して、四人が一斉にこちらに顔を向けました。

「お願いします。西武線と中央線、二つの改札があって、どちらに行けばいいのかわからなくなってしまったのです。」

母は、二つの路線のそれぞれの改札横の窓口に彼女たちを連れて行き、駅員さんにサポートをお願いしました。別れ際に、彼女たちが母の手を握って何度もお礼を言っていたのが印象的でした。

帰り道、私はずっとその光景を思い出していました。そして、私が「奇妙」だと感じた理由は、電車ごっこのような女性たちの姿だけではなく、彼女たちを目にしていながら何事もないように通り過ぎていく人々の様子にもあったことに気付きました。彼女たちの周りには、携帯電話をいじりながら待ち合わせをしているような人も大勢いました。しかし、まるで彼女たちが存在していないかのように、誰もが無関心でした。母が声をかけるまで、一体どれほどの時間を彼女たちはあの場所で立ちすくんでいたのでしょうか。もし自分だったら……と、私は目を閉じて想像してみても怖くなり、そして悲しくなりました。

母が、白杖を頭上に高く掲げている人がいたら、それは **SOS** のサインだと教えてくれました。しかし、彼女たちは誰も白杖を掲げていませんでした。調べてみると、そのサインは、視覚障害者の方たちですらまだ知らない人が多い、ということがわかりました。また、**SOS** のつもりで白杖を掲げたが、誰も声をかけてくれず悲しかった、という体験談も読みました。サインが世間に周知されることはもちろん重要です。しかし、それよりも、「誰かを気遣う気持ち」が広まってほしいと思いました。「困っていないかな」「大丈夫かな」と、思いやりを持って気遣うことができれば、サインがなくても助けになれるのです。

「バリア（障壁）フリー」は、様々な場所で進められていることがわかります。

段差をなくす、電光掲示板を設置する、音声案内を流す、など、物理的なバリアは取り除かれつつあります。しかし、最も大きなバリアは、私たちの心にあるのではないのでしょうか。困っている人に気付いても、自分には関係ないと思ったり、誰か他の人が助けるだろうと人任せにしたり、どうしたらいいかわからないからと見て見ぬふりをしたり——。「無理解」、「無関心」というバリアがなくなれば、私が駅で体験したような出来事は起こらないはずです。では、そのバリアを取り除くために必要なのは何でしょうか。私は、「想像力」と「勇気」だと思います。目を閉じて、初めて来た駅で人混みの中立っている自分を想像してみてください。車イスに乗っている自分が、階段しかない建物にいる場面を想像してみてください。とても不安で、「誰か助けて」と思うのではないのでしょうか。想像力を働かせれば、困っている人が求めていることに気付くことができると思います。そして、少しの「勇気」を出して、声をかければいいのです。

心のバリアフリーが実現できれば、その他のどんなバリアも乗り越えられると思います。

私の住む小金井市には、「障害のある人もない人も共に学び共に生きる社会を目指す小金井市条例」があります。その中に、「共生社会」という用語の定義が次のように書かれています。

『共生社会 差別を解消し、障害者と障害者でない者とが分け隔てられることなく、相互に人格と個性を尊重し合いながら、地域の中で共に手を取り合い安心して暮らすことのできる社会をいう。』

私たち一人ひとりの意識と思いやりの心が、社会を変えていくのだと思いました。私も母のように、困った人を見かけたらためらわず声をかけて手助けしようと強く思いました。

駅で、視覚障害のある女性たちを見送った後、母が言いました。

「思いやりのバトンがつながるといいね。」

彼女たちが家に着くまでの間、どうか彼女たちに優しく手を差しのべる人が現われますように。私もそう祈りました。

「ふつう」の多数決

福岡県 福岡県立嘉穂高等学校附属中学校 1年

児嶋 杏奈 (こじま あんな)

「ふつう」って何だろうと、小さいときから思うことが多かった。誰かにとっての「ふつう」は他の人から見れば「異常」で、「ふつう」かどうかなんて、「ふつう」だと思ふ人の数と「異常」だと思ふ人の数を比べて、どちらが多いかで決まっているようなものだ。一般的な意見なんてものは、所詮は多数決で、だから、物事の本質ではないはずなのに。

女子は女子らしく、男子は男子らしく。これが「ふつう」なら、「私が私らしく」あることがなぜ「ふつう」ではなくなるのだろう。

スカートをはいて、「私」という一人称を使うのが「女子らしい」のなら、普段はズボンをはいて、日常的な会話で「僕」という一人称を使う私は、一般的な意見——あくまで多数決だが——では、「ふつう」ではないのだろう。そんな私が、今日は「表現の自由」と「ふつう」について考える。

学校の制服は、女子用で、もちろんスカートだ。あまり嬉しいことではない、できれば男子の着ている制服が着たいが、私の戸籍の性別は女で、仕方のないことだと思う。でも、私が「僕」とつかうと、たいていの場合、疑問に思われる。「え、何で」

仲の良い人はそのことを認めてくれている。でも、あまり関わりのないクラスメイトの躊躇のない質問は、些細なことかもしれないが、何度も続くと、だんだんきつくなっていく。

「ボクっ娘なんだね」

中途半端な知識から、無理矢理カテゴライズする人もいた。だんだん、自分が分離していくような気がした。そんなとき、作文を書くときに「私」と書くことにも違和感を覚えるようになった。本当に、これは自分の考えていることなのだろうか。悩みに悩んだ末、私が最も信頼する方に相談することにした。

私の相談をその方は真面目に聞いてくれて、「作文や、先生に対するときの『私』は敬語だと考えれば良い」「最終的に社会人になったら性別に関係なく『私』と使うから」「変だという人とはあまり関わらなければいい」という風に、アドバイスしてくれた。「私」が敬語だという考え方は、今までの私にはないもので、言葉の一つ一つが、励ましとなった。

私は、できることなら男子になりたいけれど、それを学校で言うのは、あまりにリスクが大きい。イジメられるかもしれないし、不必要に優しくされるかもし

れない。実際は、この作文を書いていることすらも、かなり危険なことだと思う。けれど、人間は一人一人同じようにはできていないのだから、言葉にしないと、私の「ふつう」とあなたの「ふつう」が違っているということすらも分からない。分かっていないことが分からない限り、分かるには絶対出来ない。だから、私は今、この作文を書いている。

LGBTQの方々にとっての「ふつう」は他の人から見れば「異常」かもしれない。でも、それはLGBTQだからという訳ではなくて、人間の一人ひとりの思考回路が違うから起こることなのだと思う。だから、同じ家族でも、同じ学校の人でも、いくら気が合う人でも、一から十まで全部、まるっきり同じということはない。みんな違ってみんな良いかは別として、みんな違うのである。

もし、あなたがみんなと違うからという理由で、「ふつう」ではないからという理由で、イジメられているとすれば、それはイジメている人の「ふつう」があなたの「ふつう」と違っただけである。だから、自分はおかしいのだと悩まなくていい。他のところへ行けば、あなたが「ふつう」で彼らが「ふつう」ではないかもしれない。「ふつう」はただの多数決である。

自分を表現することは自由で、それは基本的人権の一つだ。表現の自由は権利なのだから、それでもしイジメられるのなら、確実にイジメた方が悪いのである。自分達が「ふつう」だと思っている人は用心した方が良いかもしれない。せつかく表現の自由があるのだから、自分の「ふつう」と誰かの「ふつう」の違うところを見つけるために、自分の「ふつう」を表現してみたら良いと思う。

私も公の場ながら、最後に一つ言わせてもらいたい。

僕はこのままの僕でありたい。

「人権の階段」

千葉県 船橋市立三田中学校 2年

三富 詩花 (みとみ うたか)

「コツ、コツ、コツ」街で白杖をつくこの音を聞くたびに、私はつい振り返ってしまふ。そして大好きな「杖のオジさん」の事を思い出すのだ。私は思わず「大丈夫かな？困っていないかな。」そう心の中でつぶやいては、その方をただただじっと見守る。そして、無事見送ると安心して歩き出すのだ。

私の親戚に強度の弱視で白杖をついているオジさんがいる。祖母の兄にあたるオジさんは、生まれつき強度の弱視があるにもかかわらず、もう片方の目を不運な事故で失ってしまった。私が物心ついた頃には、オジさんが杖をついて外出するのも、小さな私にはごくごく当たり前の風景だった。目が見えなくて大変なはずなのに、そんな素振りを少しも見せず、いつも明るくて優しいオジさんが私は大好きだった。それどころか、幼い私にはオジさんがヒーローのように思えてならなかったのだ。なぜかという、オジさんは複雑に並べられた点だけで文字を読んでしまふし、親戚が集まればみんなにマッサージやお灸をやって、まるで体の中が心の目で見えているかのように、悪い所もピタリと当ててしまふ。それに、声や足音だけで誰がいるかを見分けられるし、私の声のトーンを聞くだけで、「何かあったか？」そう気遣いもしてくれる。オジさんは、たとえ目が見えなくても、その数十倍も、数百倍もいろんな事が出来るすごい方だと思っていたのだ。

月日がたち、私は去年親戚のお葬式で久々にオジさんに会うことになった。「コツ、コツ、コツ」懐かしい白杖の音と、「詩花ちゃん！」と明るく呼んでくれる優しい声。振り返るとそこには、少しシワが多くなった笑顔と、腰を痛そうに丸めてゆっくりと近づいてくるオジさんの姿があった。「大丈夫？」何人もの親戚がオジさんに手を差し伸べた。そして、「段差があるよ。」「椅子に腰かけて。」と声をかけ、人々はオジさんを囲んだ。その時に普段明るいオジさんの表情が少しだけ曇ったように思えた。人一倍周りに気を使うオジさんだから、お葬式の席でみんなの目が自分に集中してしまった事に、恐縮してしまったのだろう。オジさんはみんなが集まっている部屋を出て、廊下の目立たない隅の方の椅子にポツンと座った。私がすぐ隣に座るとオジさんは少しびっくりして、声を聞いて少しほっとした顔になった。そして、「みんなに悪いな。」とため息をついた。「会社関係の方々もいてまずいから、これはしまおうか。」とそっと白杖をカバンの中にしまった。オジさんが自分の障害の事を隠し、気まずそうな姿を見た時、私の心の中に黒いモヤがかかり、前が見えなくなっていくような衝動を受けた。周

りは優しさゆえの行動だから何も悪くない。ましてやオジさんは何も悪いことはしていない。でも、オジさんが一歩下がらなければいけない状況を見ているうちに、私の中に強い風が吹いてきてそのモヤを追い払おうとした。「私がオジさんの杖になろう！」そう思うと一筋の光が見えてきたように感じた。

気を使うオジさんだから、過剰に気を使った話などせずに、そばにいて普通の話しながらオジさんの手を支えた。少しだけ難しかったけど、いつも通りにする事、周りの人となんら変わらない接し方をする事、それがオジさんの居心地の良い場所なんじゃないかと私には思えたのだ。「詩花ちゃんがいるから大丈夫ね。」周りの親戚が私に任せてくれた時、私は嬉しかった。オジさんが周囲に気を使い、一步一步と下がっていくその心に寄り添う事ができたのだ。オジさんがいつもの笑顔になってきた時、私はオジさんのもう一つの目になれた気がした。

その時まで私は障害がある人がいると、自分が手となり足となり、身の回りの事を全て手助けする事が良い事だと思っていた。それを望む人もいるだろう。でも、オジさんのように、そうすることで、その人の居心地が悪くなってしまふのだとしたら、今までの考え方を反省しなければならない。なぜなら、それは障害者より一段上に上がって上から見下ろしていたようなものだったからである。

人の感じ方や捉え方は、その人によって違う。その人のニーズを間違えると、それはとたんに人権差別につながるかもしれない。私は今回の件で最初は杖をしまったオジさんが可哀そうと思っていた。しかし、後から考えると、実はオジさんがしてくれた気づかいを、周囲の人が無にせず受け入れた素晴らしい瞬間だったのではないかと考える。それこそが、障害者が平等に社会で生活していけるために、目指すべき姿なのではないか。障害者が、障害の事で、人権の階段を一歩下がってしまうのは悲しい。そうならないよう、周囲がその人の気持ちに寄り添い、一緒に階段を上っていけるような社会を作りたい。そのために、私はその人、一人一人の気持ちを何よりも大事にしてゆきたいと思う。今日も、オジさんが笑顔で一歩を踏み出せるように。

諦めない心を持って

大分県 大分市立竹中中学校 3年

甲斐 潤樹 (かい みつき)

「読み書きが苦手なのでパソコンを使わせてください。聴覚が過敏なのでヘッドホンも使いたいです。」

初めて会う中学の先生たちの前で僕は勇気を出してお願いをしました。

僕には障がいがあって、苦手なことや出来ないこと、少し大変と感じる場面があります。

みんなと同じように学び、一緒に学校生活を送るために、中学に入学する時に合理的配慮を求めました。

「読むこと書くことは諦めたの？」

黙って聞いていた中学の先生が僕を見ました。「大丈夫ですよ。」その言葉を期待していた僕は怖くて何も言えなくなりました。

「読むこと書くこと、学ぶことを諦めないために配慮が必要なんです。」

隣で母が答えました。

こうして僕の中学校生活は始まりました。

授業中パソコンを使い、騒がしい時はヘッドホンを付けます。疲れた時は保健室で休むことも出来ます。みんなと同じように授業を受けて勉強できること、友達の中で生活出来ることがとても嬉しかったです。

けれど、いつも僕とみんなの間に目に見えない大きな壁があって、僕は孤独を感じていました。心無い言葉に傷つき、理解ない対応に心が折れそうになることもありました。みんなが頑張っている時に頑張れなくて罪悪感で惨めになることもありました。

そんな時は、信頼できる先生に何度も相談して助けてもらいました。それでもうまくいかない時は母に学校に来てもらい先生方と話し合いを重ねました。一緒に過ごして僕を見てもらい、心を割って話し合うことで、僕とみんなの間の壁は小さくなっていきました。

今では全く壁を感じることなく、僕は当たり前のように配慮を受け、みんなはそんな僕をそのまま受け入れてくれています。

中学三年になり進路を考えるようになりました。先生にお願いして、いくつかの高校に問い合わせてもらいました。

「配慮を申請している生徒はいません。」

「前例はないが前向きに検討します。」

その言葉を聞いた時、「また一から説明して何度もお願いしなくてはいけない。」と思いました。僕の言って欲しかった「大丈夫ですよ。」という言葉は聞けませんでした。「みんなは行きたい高校を目指して勉強を頑張ればいいのに、何で僕は配慮のことまで心配しなければならないのか。」イライラして母に八つ当たりをしました。

「もう面倒だからいちいち説明したくない。高校なんか行かなくてもいいや。」そして、勉強する気にもならなくてダラダラしていたら一冊の本が目にとまりました。

「ぼくの命は言葉とともにある」福島智先生の本です。福島先生は、盲ろう者として初めて大学進学をした人で、今は東京大学の先生です。

僕は小学校の時、福島先生と会って話す機会がありました。先生の隣には指文字で僕たちが話している言葉を先生の手で打っている人がいました。見えなくて聞こえない先生と僕たちは向き合って普通に会話をしました。僕たちの間に壁はありませんでした。

「自分のやってみたいことは簡単に諦めないほうがいい。諦めずにやっていたら案外うまくいくよ。」

先生が僕に言ってくれた言葉です。目が見えなくて、耳が聞こえなくなった時、指文字という方法が見つかったこと、入れてくれる大学がない時も諦めずに挑戦したこと、先生は自分の経験を話してくれました。そして、「壁にぶつかっても打ち破る方法を見つければいい。」と教えてくれました。

僕にはやりたいことも将来の夢も、そのために行きたい高校もあります。僕もみんなと同じように行きたい学校に進学して、夢を実現したいと思いました。

高校の体験入学が始まりました。

「聴覚過敏があるのでヘッドホンを使用していいですか？」

受付の人に声をかけました。ヘッドホンを付けた僕に向けられる人の目が気になります。大きな壁を感じて怖くなります。

けれど、安心して中学校生活を送れるように僕を支えてくれた先生、いつも応援してくれる家族に見守られて、勇気を出して一步を踏み出しました。

僕はこれからも必要な配慮を求めて、学ぶことを諦めない。行きたい学校に進学して夢を叶えたい。そこに壁があるのなら、僕を見て知ってもらって打ち破りたい。次に続く誰かが「大丈夫ですよ。」と言ってもらえるように、前例がないのなら僕が第一号になりたいと思います。諦めない心を持ち続ければ、わかりあうことは出来る、壁はなくなりきとうまくいくと信じています。

見えないマークに目を向けて

神奈川県 横浜市立南高等学校附属中学校 3年

森 彩夏 (もり あやか)

妊婦さんがつけるマタニティマーク，体や心に何らかのハンデがある方がつけるヘルプマーク。日々色々なマークを目にする機会があるでしょう。マークは文字の読めない小さな子供にも分かり，それをつけるだけで見た人は理解し手を差し伸べられる，とても便利なものです。

では，こんなマークを知っていますか。「わけあってこちら側で止まっています」その言葉とともにエスカレーターのイラストがかかれています。私は知りませんでした。電車の乗りかえでエスカレーターを利用した際，初めてこのマークを目にしました。もちろん文字を読むことができるので理解はできます。でも「わけあって」とはどういうことなのか分かりませんでした。その駅にはいくつもの路線が集まり，エスカレーターにもたくさんの人が溢れていました。そんな中でそのマークをつけた男性がエスカレーターの右側で止まっていたのです。男性の後ろには長い列ができていました。そのことに腹を立てた方がその男性に「早く進めよ。右側は歩く奴が乗る側なんだよ。」とどなり立てたのです。男性はただただ申し訳なさそうにしていました。私は「何か訳があるみたいですよ。」と声をかけるか迷いましたが結局声はかけられませんでした。家に帰ってからふとそのことを思い出し，そのマークについて調べてみました。「マナーアップキーホルダー」というらしいそのマークは，体の麻痺などをかかえる方向けだそうです。例えば，体の左側が麻痺している方は右側で手すりにつかまらなくてはいけません。けれども多くのエスカレーターでは右側が歩く人用というまちがった暗黙のルールが生まれているので，そうした人たちが右側で止まりにくいことがあります。そんな時，そのマークがあれば麻痺を抱えた人も，その後ろにいる人も嫌な気持ちにならずに止まっていることができます。私はいいアイデアだなと心から思いました。

しかし，同時になぜマークをつける必要があるのだろうかと思いに思いました。何らかの事情があるのだろうかとおおらかに考えられればこのマークはいりません。きっとエスカレーターの右側で止まるという本当に小さなことすら，許せないような雰囲気があるからだと思います。もしも自分がマークをつけなくてはいけなくなったら今の社会はとても生きづらいものなのでしょう。では理想の社会とは何だろうと考えたとき，私はマークなどつけなくても互いに互いの違いを尊重し手を差し伸べられるような社会だと思います。互いの違いを尊重することはお

互いの人権を守ることであります。

私は今年の春、初めて松葉杖をつきました。松葉杖はマークと同じくらい、自分が怪我をしているということを周りに知らせます。私に気がついたたくさんの人がバスで席をゆずってくれました。時には荷物を持ってくれる方もいました。私にとって歩くのはとても難しいし、揺れるバスの中で立つのも難しいことでした。だからそうした人たちの温かい気持ちにふれるたび私はとても嬉しい気持ちになりました。そんな経験から誰が、いつ、どんなハンデを背負うかは分からないけれど、そうした時に手をさしのべてくれる人がいたとしたらきっととても救われるのだろうと思うようになりました。

そして私は自分が分けてもらった優しさを今度は誰かをたすけることに使っていきたいと思いました。

もちろんマークをつけている方への配慮は必要です。でも、それだけではなくて周りの人に心配りをすることが理想の社会の実現に不可欠なのです。見ためではわからない、いわば「見えないマーク」に気がつくことは難しいことかもしれません。時に空回りすることもあるでしょう。でもそうやって周りの人たちを気にかけることでいつか優しさに溢れた社会に近づいていくのだと思います。いつの日か、マークなどつけなくても互いを助け合えるような社会にしていけるかは自分たちの行動次第なのです。

「いじり」は「いじめ」

兵庫県 姫路市立高丘中学校 2年
尾崎 七星（おざき ななせ）

「いじられキャラ」という言葉を聞くと、「みんなから愛される人」という印象を持つと思う。だが、本当にそうなのだろうか。

私の友人に、よく周りからいじられている子がいた。その子はいつもニコニコしていて、誰にでも優しく、全く怒らないタイプだった。だからみんなは毎日その子をいじっていた。最初のころは、軽いいじりだった。私もその子のことをいじり楽しんでた。だがそのいじりはだんだんエスカレートしていった。その子のことをひどくバカにしたり、みくびった発言をしたりしていた。日が経つごとに、いじりはひどくなっていった。ひどい時にはその子を部屋に閉じこめ、出られないようにドアを押さえたり、カギをかけたりした。

「ねえ開けてよ！」

そう言ってもみんなは笑っていた。さすがに私は、いじめなんじゃないかと思った。周りの人も、何人かはそう思っているようだった。しかし、その場の空気や本気で楽しんでいる人達に怖気づいてしまい、私は何も言えなかった。そして何よりその子も笑っていたからだ。嫌そうな顔をせず、楽しんでいるように見えたからだ。なので私はこの子は大丈夫なんだなと思い、そのままみんなと笑っていた。この頃から、その子へのひどいいじりは毎日になり、あたりまえになっていった。その子をたたいたり強く押したり、その子から逃げたり避けたり、もうなんでもありだった。しかしその子は一度たりとも嫌な顔をしたり怒ったりはしなかった。ただ笑っていたのだ。もう私は、ひどいいじりを受けている所を見ても、何とも思わなくなっていた。私はその子のことを、「何をされても怒らない子」と勝手に決めつけていた。

ある時から、私も周りの人からいじられるようになった。初めはちょっかいをかけられるぐらいで、私も楽しかった。だがそのいじりもだんだんひどいものになっていった。まず、私のことが嫌いだと何人かに大きな声で叫ばれた。冗談だということは分かっていたが、何だか惨めな気持ちになった。私がみんなの方に行くと逃げられたりした。くつをとられたり、隠されたりした。すごく嫌で、やめてほしかった。本当は嫌って言いたかったけど、もし言ったら空気を壊してしまいそうと言えなかった。何より、仲の良い友達にいじられるからすごく言いづらかった。だから笑って耐えることしかできなかった。ところが私へのいじりは日に日になくなっていく。ホッとしたが、心の中はもやもやしていた。

私は実際にいじられてみて、気付いたことがあった。それは、「いじり」は「いじめ」と変わらないということ。いじっている人からすれば、「いじめ」ではなく「いじっているだけ」と思うかもしれないが、いじられている本人からすると、「いじめられている」と感じてしまう「いじり」もあるのだ。

そのことを身に染みて実感する出来事があった。毎日みんなからひどいいじりを受けていながらも、笑顔だった友達が泣いたことだった。私はすごく驚いた。この友達は「何をされても怒らない子」ではなかったのだ。そもそも、そんな人なんていないのだ。そして私は気がついた。それは、無意識に私は「いじめ」をしていたということだ。「軽いいじり」は、いつのまにか、「いじめ」に変わってしまっていたのだ。私はその子に謝り、それ以来いじることをやめた。

私は実際にいじられることで、「いじられキャラ」の辛さを知った。「いじられキャラ」はけして「愛されキャラ」ではなかったのである。私は「いじめ」と「やりすぎたいじり」は同じだと思うが、私は「やりすぎたいじり」の方が恐ろしいことだと思う。それは仲の良い友達にされるからである。嫌われたくない思いがあるから、嫌と言えないし助けを求められないのだ。私はそんな恐ろしい「やりすぎたいじり」をする人がいなくなっしてほしい。そのいじりはいじめと変わらないということに気付いてほしい。そして何より「いじめ」や「いじり」に苦しんでいる人がいなくなっほしいと思う。いじられて嫌な思いをしている人は、嫌と言える勇気が必要だと思う。その空気を壊さなければ、状況は何も変わらない。いじっている人は、自分がいじめをしているという自覚がない。だから勇気を出して行動を起こさなければならないのだ。

私は、「いじり」は「いじめ」と変わらないということを多くの人に知ってもらいたい。そして何より、「いじめ」や「いじり」がこの世界からなくなっほしい。

もし、いじめやいじりで苦しんでいる人を見つけたら、手を差し伸べようと思う。

ものの見方は一つじゃない

三重県 学校法人三重高等学校三重中学校 2年

川瀬 彩（かわせ ひかる）

今年の夏休み、私は久しぶりに小学校の同級生に会った。別々の中学校に進学したため、お互いのクラブや友だちについてしばらく話した後、ふと友だちが、「私たちの中学校にな、車椅子の先生がおるんやに。」と話し出した。車椅子の先生・・・？どうやって授業をされるのだろうか？黒板に手が届くのだろうか？何の教科の先生なのだろうか？自宅から中学校までどうやって通勤してみえるのだろうか？疑問に思った私は友だちに聞いてみた。すると、授業は主に電子黒板を使い、手元のタブレットやスマートフォンで操作をされること、自動車通勤してみえることなどを話してくれた。

車椅子の先生なのにすごい、と思った私は家に帰って家族に話した。

「車椅子の先生やのに、めちゃわかりやすく教えてくれるんやって。すごいと思わへん？」

私は、家族から当然「そうやな。すごいな。」

という返事が返ってくると思っていた。私の母は小学校の先生をしている。「やりがいのある、楽しい仕事だよ。」といつも話してはいるが、常に忙しく体力も気力もいる仕事であることは私にもわかる。そんな母だから、車椅子で中学校に勤め、わかりやすい授業をされる先生のすごさを共感できると思っていた。しかし、母から返ってきたのは、

「車椅子の先生『やのに』わかりやすい、ってどういうこと？」

という言葉だった。聞かれた意味が分からなかった私が黙っていると、母は続けた。

「その先生は、何かの理由で車椅子で生活してみえるんだね。きっとお体の中でうまく動かないところがおありになるんだろうね。でも、そのこととわかりやすく教えることは関係ないやんか。お母さんたちも、他の小学校や中学校の先生たちもみんな、教え方はいつも考えたり工夫したり研究したりしとるよ。その先生もそうやって毎日研究したり工夫したりしてみえるから授業がわかりやすいんやろ。それと車椅子に乗ってるか乗ってないかは関係ないやん。」

いつもと違う母の口調になんと返事をしていいかわからずにいると、そばで聞いていた父が言った。

「いろいろ不便なこともあるやろけど、子どもたちのことが大好きな先生なんやろな。なんていう名前の先生や？」

父に尋ねられて、私はその先生の名前を友だちに尋ねなかったこと、友だちも私にその先生の名前を言わなかったことに気づいた。

「わからん。聞かへんだし、友だちも『車椅子の先生』しか言わへんだもん。」と答えて居間を出た。

自分の部屋に戻ったが、父の言葉が気になった。友だちはなぜ、先生の名前を言わなかったのだろう。そして私はなぜ「何ていう先生？」と聞かなかったのだろう。いろいろ考えているうちに、ふと小学校の時の「友だち発見！」の活動を思い出した。いつもいっしょにいるクラスメイトと、得意なことや好きなこと、実は苦手な物や将来の夢などをお互いに話し合い、聞き合った。よく知っていると思っていたクラスメイトのいろいろな面が見えてとても楽しい時間だった。どの子にもいろいろな個性があること、自分が持っている狭いイメージだけで相手を判断してはいけないことを小学生なりに感じた。そのことを思い出した時、私は自分の中の「決めつけ」に気がついた。友だちの「車椅子の先生」という一言で、その先生に対して「かわいそう」「私たちにはできることができない」「でも先生だなんてすごい」と思い込み、その先生の名前も知らないのにその先生をわかったような気持ちになっていたと思う。もしかしたら、私に話した友だちも「車椅子の先生」の一言でその先生の全てを私に紹介した気になってしまったのかもしれない。

家族に自分の考えたことを話すと、母は、

「そやな。彩は一人っ子やけど『一人っ子はわがママや』『一人っ子はかわいそうや』と言われてうれしい？『A型は整理整頓が得意で几帳面。でもまじめすぎておもしろくない』ってよく言われるけど、少なくとも彩に関してはそれは違うわなあ。整理整頓とか。」

と笑った。そしてそのあと言った。

「車椅子の先生は、車椅子に乗ってるってだけで、他の先生と何も変わらないよ。人を決まった見方でしか見られないと、その見方からちょっとでもはみ出す人とは自分から壁を作ってしまうよ。それはとても寂しいよ。」

中学校に進学し、私の世界はぐっと広がった。今後さらに広がり、職業・性別・国籍・年齢・生き方や心身の個性——様々な違いに出会うと思う。今回、私は「決めつけ」は「壁」「差別」を生むことに改めて気づけた。そのことを忘れずに、自分だけでなく学級や学年、地域や社会の中でもみんなが笑顔でいられるような日々の過ごし方をしていきたい。